

森 一郎著 『源氏物語の主題と表現世界 — 人物造型と表現方法 — 』

伊 井 春 樹

私の個人的なことから記すと、森一郎氏のお名前と論文を克明に記憶したのは、「国語国文」の昭和四十年四月号に掲載された「源

氏物語における人物造型の方法と主題との連関」であった。論文の冒頭に「要旨」が付された斬新な形式とともに、主題の設定に随伴して人物造型がなされるといふ、ユニークな発想による提言と論証に、まだ院生にすぎなかつた私は胸の躍るような興奮を覚えた。これが『源氏物語』の新しい研究方法の息吹きなのだろうと、それからほどなく面識を得るようになったこともあり、敬服の思いでその後は必ず心がけて森氏の論文を探して読むように務めていった。四年後の四十四年六月に最初の論文集『源氏物語の方法』を上梓され、惠贈されると私はすぐさまむさぼるような思いで拝読し、大半は一度読んではいしたが、あらためて全体の位置づけとともに、方法論の大きな構想を知ることができた。今取り出してみると、各所に赤の

線を引き、欄外には鉛筆の書き入れも見い出すなど、私には貴重な研究のあかしでもある。

その後、『源氏物語の主題と方法』（昭和54年）、『源氏物語作中人物論』（昭和54年）、『源氏物語生成論』（昭和61年）、『源氏物語考論』（昭和62年）と、研究者としてのみごとな軌跡の集積を重ねられ、このたび第六冊目の論文集となったのである。「あとがき」によると、学問には定年はないものの、大阪教育大学の定年を来春にひかえてのひと区切りとして、近年の論文を一書にしたのだという。私としては、もう三十年にわたって森論文に接し続けてきたわけ、ひとつの節目の本としてあらためて感慨深い思いで読み耽ったのである。御本をいただいですぐさま読み終え、森氏に感想の一端を申し上げたが、書評を求められた後二度目読み直し、これまでの著書にもそれぞれの意欲的な見解の開陳が見られはしたが、今回はそ

れ以上に挑戦的な問いかけがあるだけに、研究史に位置づけての後の評価はともかく、私なりの現在の感想めいたものを綴ることに
よって当面の責めを果たさせていただくことにする。

まず、本書の構成を記しておく、

- I 源氏物語の主題の世界―人物造型を中心に―
 - 一 兵部卿の宮
 - 二 頭中将論
 - 三 疑似王権・まぼろしの後宮・六条院 その生成と変容
 - 四 六条院の変容
 - 五 柏木の恋
 - 六 竹河巻の人物造型と語り手「悪御達」及び作者
 - 七 薫像の内と外
 - 八 薫の恋
- II 源氏物語の表現世界―人物造型を中心に―
 - 一 源氏物語の表現構造としての敬語法
 - 二 源氏物語の表現構造としての敬語法(統)
 - 三 源氏物語敬語体現論
 - 四 源氏物語表現の戯曲的構造
 - 五 源氏物語の表現構造・その内在的形象性
 - 六 源氏物語の内在的言語・内在的世界
 - 七 源氏物語の人物造型と人物呼称の連関

八 源氏物語の人物造型と人物呼称の連関(その二)

九 源氏物語の表現方法

一〇 源氏物語の人物造型と語りの視点・方法

となっており、大きくは主題の世界と表現世界との二つに分かれるが、サブタイトルはいずれも「人物造型を中心に」とするように緊密な関係にある。しかも、Iの五以降は表現や叙述、語りの問題を扱ってIIと重なっており、本質的には表現の方法を追究したのが本書の眼目ともいえるであろう。とりわけ、森氏の独自の世界を拓いたのは敬語法であり、戯曲的構造と提唱する表現空間の問題である。このような次第で、ここではスペースの関係もあり、敬語法を中心とした表現に関して検討を加えることにする。

学校で習う文法書は平安朝の作品を用例とし、しかもその大半は『源氏物語』を典拠にしての立論である。わずか一例であっても、それが平安朝一般のことばの法則として存在していたように説かれ、ゆるぎのない大系が構築されてきた。抽象化するとそのようになるのかも知れないが、一方では作品の実態とはかけ離れた法則になってしまったことも否めない事実である。それを作品の読みから、しかも『源氏物語』に内在する実態を抉り出し、まさに物語としての敬語の世界を明らかにしたのが、玉上琢彌博士の「敬語の文学的考察」であった。すでに「物語音読論序説」も発表されており、そのほかを含めての一連の論考は『源氏物語』の研究に画期的な影響を

与えることになる。秋山虔氏の「源氏物語の敬語」による明石上の精緻な読み、「源氏物語の敬語法」等の根来司氏の論、その他の敬語の多くの考察などいずれも玉上理論の延長にあり、敬語を含めた表現の豊かな読みが可能になったといえる。森氏の解釈も玉上文法の範疇にあるが、たんに敬語の文学的な読みの多様さを示しただけではなく、そこに音読論も加えることによって、「源氏物語」の世界があらたな黎明を得ることになったといっても過言ではない。

帝木巻の雨夜の品定めの場合で、源氏と中将との対座において、源氏には敬語が付されるのに対して中将は無敬語であるなど、二人の差は歴然としている。源氏が居眠っている、源氏が意識される限りは中将には敬語がなく、それが中将と左馬頭だけが叙述されるとなると、中将に敬語が用いられてくるのである。このように一見法則性のない敬語の使用に、どのような法則性が見いだせるのか、この種の表現をめぐっての解釈はこれまでも論じられてきた。森説では、「君のうちねぶりてことばませたまはぬを」との源氏の描写において、これは純粹に語り手からの「給」ではなく、中将から源氏への敬意のあらわれだとする。「語り手（作者）は一定視点から客観的に作中人物達を見ているのではなく、人物については離れ、また別の人物につき、それぞれ黒衣のように人物に密着し、人物と共に声を上げる。わたしたち常識の第三者的な地の文ではなく、作中人物間を移動しながら、人物それぞれと一体になって他の人物を

見ている描写の地の文である」と、後にはこれを音読論と結びつけて戯曲的構造と主張する。「ことばませたまはぬを」との表現は、語り手が離れた場所からレポーターのように描写しているのではなく、頭中将に密着し、その眼と心からの表現だというのである。語り手は消えるのではなく、頭中将と一心同体となり、同じ心理状態となって語り、次は別の人物の心内に入り込んで語っていく。もちろん語り手の独自の判断による描写もあるわけで、このように語り手は自由自在に飛翔しながら物語を語っていくのだが、同時に読者も語り手と一体となって視点の移動につきあうことになる。

語り手が聞き手を前にして光源氏の物語を語る場面を想定すると、語り手は急に頭中将の声色で語りはじめ、次は左馬頭になりきって語っていく。聞き手も、そこにはもはや語り手の姿はなく、頭中将を幻視し、左馬頭の姿を髣髴とし、またふと我にかえて語り手の説明も聞くといった構図なのであろうか。物語の音読とは、そのような営みであったのだとする。『ネバーエンディングストーリー』のパスチアン少年ではないが、物語の世界に入りこみ、いつのまにか自分も登場人物になってしまうように、聞き手も物語世界から距離を置いて聞くだけではなく、時には作中人物の肉声も聞き、ともに喜び、悲しむといったところであろう。

桐壺巻冒頭で、「すぐれて時めきたまふありけり」についても、語り手の直接的な敬意の有無ではなく、帝寵を受ける桐壺更衣の重

い存在性を意識した他の妃からの視線による敬意尊重の念による表現だとする。帝寵を受けるほどの更衣だとの意識によって、語り手が敬意を表して「たまふ」としたのではなく、そこには他の妃がそのように思わざるを得ない帝寵という現実の重さが語らせたというのである。これに続いて、「はじめより我はと思ひ上がりたまへる御かたがた、めざましきものにおとしめ嫉みたまふ」は、桐壺更衣からの女御たちへの敬意で、そうすることによって重庄のうめきまでが聞こえてくるのだとも説明する。固定されたカメラアイからの視線ではなく、変幻自在な語り手の移動により、聞き手もともに移動するという、まさに両者が入り乱れて臨場感を形成する物語の構造が明らかにされる。

私はこのような物語の読みにきわめて共感を覚えるし、根来説との「聞ゆ」や「奉る」の解釈の違いにしても、森説に説得力があるように思う。ただ、まだ私に十分な理解のいかない点としては、語り手の表現と作中人物からの意識による表現とのかかわりで、語り手は消えるのではなく作中人物の黒衣となって密着するという考えである。「一緒になって声を上げている」といっても、それは作中人物の思考なり発言となると、語り手はやはりどこかに行つて消えてしまうのではないか。「すぐれて時めきたまふありけり。はじめより我はと思ひ上がりたまへる御かたがた」と、多くの妃から桐壺更衣を「たまふ」とし、すぐに今度は桐壺更衣が女御たちに「たま

へ」と表現する。それは技法として語り手が妃や更衣に入りこんで語らせるにしても、そのように器用に変転できるものか、それと聞き手は同じような移動について行けるものか、などとも思ったりする。

これは敬語法の問題だけではなく、ひとえに物語のなりたちなり語りへの構造ともかわるだけに、大きな問題を内包しているであろう。勿論、私のささやかな危惧の念などはずれにすぎなく、語り手の領導によって作中人物の思考が表出されているのかも知れない。さらに森説を發展させ、物語の語りの構造を解き明かしてはしく、御著の紹介をかね、賛辞の思いを綴ることによって書評に替えさせていただきます。(平成六年七月、A5版、三三〇ページ、九、〇〇〇円、勉誠社)

——いい・はるき、大阪大学文学部教授——